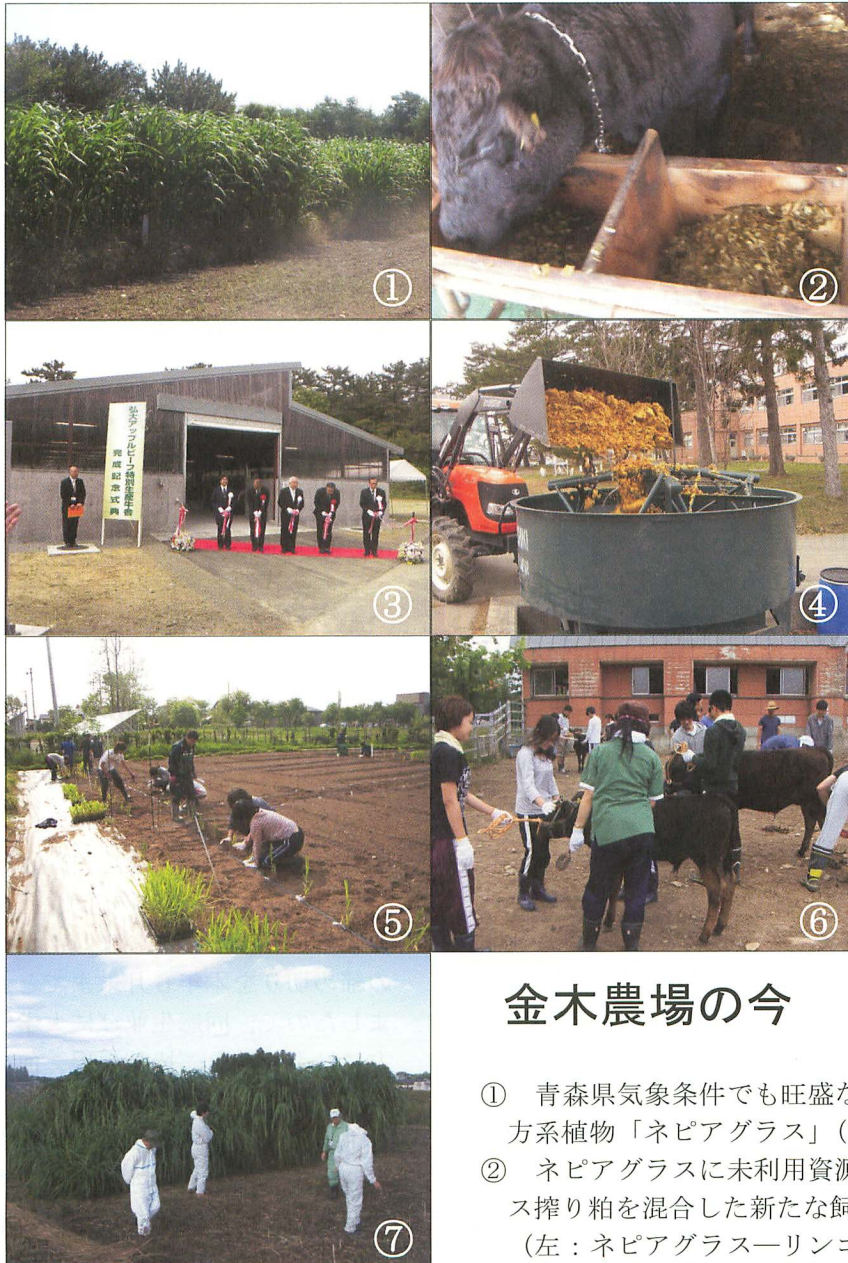




弘大農学生命科学部 同窓会会報

第33号

平成27年4月 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



金木農場の今

- ① 青森県気象条件でも旺盛な生育を見せる南方系植物「ネピアグラス」(金木農場圃場).
- ② ネピアグラスに未利用資源のリンゴジュース搾り粕を混合した新たな飼料の開発
(左: ネピアグラスーリンゴ搾り粕混合飼料、
右: ネピアグラス単味飼料).

- ③ 2011年6月に学長裁量経費の支援を受けて完成した「弘大アップルビーフ特別生産牛舎」.
- ④ 弘大アップルビーフ用飼料調製の様子.
- ⑤ 農場実習でネピアグラスの栽培に挑戦する学生たち.
- ⑥ 子牛馴致の実習で動物の扱い方を学ぶ.
- ⑦ 放射性セシウム汚染農地の除染にも活躍しているネピアグラス (福島県浪江町).



祝・学部創立60周年

祈・母校弘大の地域貢献・創生の中核学部をめざして！

記念事業へのご協賛を

同窓会長 三上 巽

お陰様で創立60周年

私共の母校・弘前大学農学生命科学部の前身の農学部は、昭和30（1955）年7月1日に、青森県内のりんご生産者を始めとした学部創立を懇請しての貴重な寄附協賛金を基に、これに呼応・賛同された青森県・市町村・農業団体等の並々ならぬご尽力により学部創立の慶事を見るに至ったのであります。

爾来、平成9（1997）年10月の学部改革による農学生命科学部への改組、また平成16（2004）年4月からの国立から国立大学法人という名の法人化への移行を経て、本年・平成27（2015）年7月1日をもって創立60周年という記念すべき大いなる節目の年を迎えるところとなりました。

これも偏に歴代学部長を始めとする教職員の方々、並びに国・県・市町村・農業団体・企業等、関係機関・関係者の支援協力があったればこそであり、同窓会の立場からも改めて感謝御礼を申し上げます。

弘前大学将来ビジョン&学部再編案にみる農学生命科学部への期待

母校・弘前大学では昨・平成26（2014）年11月に、大学運営の指針となる第3期中期目標・計画（一期6年間・平成28～33年度）の策定作業の基本方針となる「弘前大学将来ビジョン」を策定公表したところであります。

将来ビジョンでは「弘前大学を東北地域の総合大学の一つとして『地域活性化の中核的拠点』と位置づけをし、その役割を追求していくこと」を基本とすること。また、その実効を図るにあたっての要諦である大学改革にあたっては「イノベーションに貢献する『理工学系・農学系人材』の育成強化を図ること」等を掲げ、これと並行して平成27（2015）年3月には、基本方針に掲げた目標・計画推進の基軸となる「弘前大学学部再編案」をも策定公表したところであります。

本再編案においては、大学全体の学生定員を60人減としている中、私共の農学生命科学部は現在の5学科のうち「生物資源学科」を「食糧資源学科」に、「園芸農学科」を「国際園芸農学科」に改め、学部全体の定員は185人から215人と30人増にと計画されているところであり、それだけに私共・農学生命科学部への期待の大きさが窺い知れるところでもあります。

記念事業へのご協賛&記念式典（H27.7.4）へのご参加を

記念事業の計画骨子といたしましては

- I. 創立60周年記念式典・記念講演・記念祝賀会
 - 記念式典：平成27年7月4日（土）13時より
（弘前大学50周年記念会館にて）
 - 記念講演：式典終了後（同会場にて）
 - 記念祝賀会：16時より（弘前大学学生会館にて）
- II. 創立60周年記念誌の刊行
- III. 学生海外研修支援
- IV. 教育備品の整備支援

これら、記念事業実施に伴う醸金協賛目標額の総額を300万円と計画をし醸金の第1次締め切りを昨年12月末としていましたが、このたび第2次の締め切りを本年6月末までとすることにいたしましたので、同窓生並びに大学学部関係者の皆様方には引き続きご協賛の程、何卒よろしくご願ひ申し上げます。

併せまして希望に満ち溢れた青春時代の一時期、東北の小京都とも称される城下町・弘前において学びあい友情を深め合った思い出の地、母校・弘大のキャンパス内で執り行われる7月4日（土）開催の記念式典への参加についてもよろしくご願ひ申し上げます。3口（1万5千円）以上ご協賛の方には記念祝賀会への参加及び記念誌の進呈は無料とさせていただきますので振るってご参加の程、何卒よろしくご願ひ申し上げます。



学部改組と60周年記念事業

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。平素より本学部の活動へご支援いただき、深く感謝申し上げます。この4月に農学生命科学部長に再任されました。引き続き学部の発展に向け努力して参りたいと思いますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

本年3月の佐藤学長の記者会見で明らかになりましたように、平成28年度から学部が新しくなります。平成20年度に改組が行われまだ8年ですが、これまでに経験したことのない少子高齢化の到来に対し、次代を切り開く人材の育成が国全体で求められ、本学もこの一端を担い改組することになります。改組の基本理念は、地域の中核大学として地域の課題を解決する教育組織や人材養成になります。本学に対する地元からの要望をアンケート調査しますと、「少子高齢化や人口減少の食い止め、地域の活性化が求められている」ことが明らかになりました。特に、青森県では豊富な食材の高付加価値化による食産業の振興や農産物の国内市場における出荷額等の伸び悩みを受け、輸出の増加などによる所得増大が期待されております。その際、同窓生各位の勤務先への訪問による調査などにご協力頂いたことに対し、この場を借りてお礼申し上げます。改組では、「食」と「国際化（グローバル化）」というキーワードのもとに、全学科が食品に関する科目や国際的な取り引きに関係する科目を大幅に増やし、履修できるようにしております。生物資源学科は、食品に関する教育研究を強化し、現在の学科を食料資源学科に改組します。また、グローバルマインドを持った学生を育成する目的で園芸農学科を国際園芸農学科とし、国際科目数の増加や全国の農学部に先駆け

て、「海外研修入門」という海外で学習する科目を学科の全学生に必修とします。学部の学生定員は185名から215名に、教員数も現在の70名から80名ほどになる予定です。学部の規模拡大により、これまで以上に地域の活性化に資する人材を養成し、地方大学として地域貢献の強化をして参ります。

今年は学部創立60周年になります。めまぐるしい時代の移り変わりの中で多くの先人各位の努力の上に、今日の学部が成り立っております。こうした人々の貢献に対する謝意と今後の学部発展にむけた決意を新たにする機会として、60周年記念の行事を学部、学部同窓会、学部後援会の協力のもとに計画しております。予定日は7月4日とし、記念式典、記念講演会、祝賀会、記念出版などを実施予定です。皆様には、記念事業実施に際し、多大なご寄付をいただき深く感謝申し上げます。お陰様で、順調に準備は進んでおります。多くの方のご参加を得て、学部の還暦を祝いたいと思いますので、ご協力のほど引き続き宜しくお願い申し上げます。同窓会のご協力なしには、地域の大学の発展は望めない状況です。我々も地域の課題解決などの研究へと舵をきる覚悟でおりますので、今後とも同窓会会員の皆様のなご一層のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。



定年退職教員からの寄稿～1



我が母校と共に半世紀

地域環境工学科 工藤 明

母校弘前大学農学生命科学部、その前身である農学部創設より60年、学生時代から今日まで学部60年間の中で4年（学生時代）+43年（技官、教官そして教員として）お世話になりました。入学当初（昭和43年4月）のガイダンスで大学正門より農学部まで歩いてくると、ほとんどが木造の建物ばかり、今の人文科学部の場所には旧制弘前高校の建物、理工学部のところから憲兵隊司令部、旅団司令部、そして農学部ロータリの所に立派な建物である師団司令部があり、この建物を外から囲むように新しい4階建ての建物が竣工された直後でした。ガイダンスはこの建物の4階（現在の402講義室）で行われ、机もイスも新品でビニールの覆いがあるままだったことを記憶しています。それから40数年、我が母校も数々の改組・改革に磨かれて（耐えて）、現在平成20年4月よりスタートした農学生命科学部5学科10教育コース体制で教育・研究が行われていますが、文科省の「大学改革実行プラン」に沿った形の改革を行わなければ、交付金の大幅減額、いわゆる飴と鞭の教育改革を迫っています。ここ20数年の間に4回の改組・教育組織の改編です。少なくとも、我が母校—弘前大学農学生命科学部では、将来を見越した教育・研究の「場」を追い求めていくことを期待致します。次は、かなり深い付き合いをさせて頂いた農学部（農学生命科学部）同窓会についてです。

農学部同窓会は「母校の発展に積極的に寄与し、会員相互の連絡・親睦を図る」ことを目的として昭和31年5月に設立されました。初代会長の横山宏氏、2代目岩井邦彦氏、3代目中尾良仁氏、4

代目油川孝男氏、そして現在は5代目の三上巽氏の下で、母校創立60周年記念事業の準備を行っています。なお、三上氏は弘前大学全学の同窓会長も兼務されており、農学部（農学生命科学部）同窓会としては誠に名誉なことだと思っています。

同窓会の幹事は、学部内に勤務している同窓生教員が3名（総務、会計、広報担当）交替で担当しているのが慣例です。三々五々（ダラダラと）納入される会費の受け口、会員の住所管理、同窓会報（学部と全学）、各種行事の準備（卒業記念写真、祝賀会、同窓会総会、母校創立記念等）さらに、弔電の手配—情報は卒業生からのものですが、時間が経った場合は欠礼とさせて頂いておりますが、せめて亡くなられて1カ月経過した程度であれば弔電を送ることにしています。所が、「私は生きてます！」と連絡（叱責）を頂いた事例があり、それからは複数の確認をしてから弔電を打つことにしました。また、電話やメールでの苦情—グツとこらえて出来る限り丁寧に対応し、こちらの立場も理解して頂く努力をする等々、ご迷惑をおかけしたことも多々あったことと思います。ただ、歴代の会長や副会長、さらに学部内の幹事の方々に助けて頂きながらの20年。幹事をやって良かったことは、自分の学科のみならず他学科の卒業生との交流が出来たこと、特に各支部の総会・懇親会に参加させて頂いた上に、卒業生の皆様に現地を案内して頂いたこと等々、たくさんの楽しい思い出を作ることが出来ました。ただただ多謝多謝！これからは、一会員として協力させていただきます。

定年退職教員からの寄稿～2



私の学部教育を振り返って

生物資源学科 原田 竹雄

私は1989年にそれまで勤務していた北海道立中央農業試験場から弘前大学農学部農学科に助教授として赴任してきました。以来、25年間お世話になりました。この四半世紀に学部名は農学生命科学部と改称され、その時を含めて3度の学科再編がありました。私が所属したのは、生物資源科学科、生物機能科学科、生物資源学科です。大学は社会の変容に先んじて変革していく使命にありますので、今後もこれくらいのペースで学部・学科の改組が行われていくべきと思っております。

私が生物機能科学科まで担当した講義科目に「分子生物学」がありました。新設科目であり、他学科も必修や選択必修科目とされたことから、受講生は120名を超えました。現在の当学部最大講義室403号室もまだ設置されていなく、理学部5階の10番教室（定員204名）で開講されました。15回の講義は全てがノーベル賞生理学・医学賞受賞者の業績内容に関わるものでしたので、冒頭で受賞者の顔写真、経歴等をスクリーンで紹介して本題に入りました。この講義室には前方窓側に十分な大きさのサブスクリーンもあり、板書と同時に順次、解説図やアニメーションの提示が可能でしたので、それらの資料の準備には時間をかけました。受講生の生物学に対する基礎知識に違いがあるため、講義内容の難度をむやみに上げることは無理なのですが、大学の講義であることを意識して、聴講生の2/3は直ちに理解できなくても可とする考えで、最後の15分間は敢えてレベルを上げた内容に徹しました。毎回ではないのですが、講義終了後には「大変面白かった」、「感激の内容です」と嬉しい言葉を告げに来た学生たちがいま

した。専門教育が始まった直後の向学心に燃えた学部2年生たちに、それなりのインパクトを与えていたのではと考えています。

私がゼミで直接卒論指導した学生は65名でした。しかし、この人数だけでは指導の質と量を表現できないところがあります。学部生は卒業研究の1年ですが、修士進学生は3年、連大進学生は5年間の指導になります。さらに、連合大学院生への留学生もいました。これらの指導年数を考慮すると数値は118となります。大学院生は21名を指導してきました。また、出身地に近い基幹大学への院進学生は22名でした。他大学の院進学は、地方大学の宿命ですので、彼らの意志に応じて、喜んで送り出してきました。これら院進学生計43名のうち、さらに博士課程（後期）進学したのは13名、内7名が既に博士号を取得して研究者になりました。先にも述べましたように、当学部との協定校（中国農業大学）から3名の連合大学院進学生を指導しました。2名が日本政府、1名が中国政府の国費留学生です。温和でかつ頭脳明晰、ゼミに大きな活力を与えてくれた彼らは、中国本土に帰国し大学教員などの研究者になっております。

以上のように、学部教育を通して多くの学生の将来に何かプラスになることを授けてこれたと考え、大学教員の冥利に尽きることで、最後に、長年お世話になった弘前大学と農学生命科学部には厚く御礼申し上げます。

地域資源利活用センター

橋本 勝

地域生物資源を活用した産業活性化に積極的に参画し地域経済の発展に貢献することミッションの再定義が策定された現在、本学部の重要な責務の一つといえます。地域資源利活用センターは、これまでの「白神研究」、「リンゴの科学」、「ナマコ研究」を統合した形で2014年度から活動を開始しました。

本研究センターでは「微生物」、「農産物」、「海産物」、「畜産物」を横軸とし、「新種・新規物質探索」、「有用性の開発」「科学的エビデンスに基づく機能の付加」、「品種改良・栽培法・飼料開発」、「市場調査・輸送法研究」、「ブランド化研究」といった研究ステージを縦軸に考え、多くの学部教員の連携の下、教育研究を展開する予定です。7月18日には、看板の上掲を行いました(右上写真)。また、9月にはホームページを開設し、センターの活動内容を紹介できるようにしました。

5月7日には延辺大学農学院と共同シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは本学部所属の学生によるポスター及と、それぞれから2名の教員が話題を提供しました。右写真は、シンポジウムで最近の成果を紹介する前田智雄准教授です。シンポジウム終了後には、懇親会を開催、情報を交換すると同時に交流を深めました。

8月8日には、センターが主催した青森県産業技術センターとの交流会に多くの本センターのメンバーが参加し、今後の研究交流の可能性を探りました。すでに共同研究を展開されている教員もあり、熱心な討論が展開され、その後の懇親会も盛り上がりました。

本研究センターでは、地域を代表する産物の更なる高価値化のみでなく、潜在あるいは未流通の遺伝子資源にその有用性などを科学的知見に基づき付加することで本学の知的財産の構築すること、それらの商品化などを通して地域経済の発展に貢献すること、さらに、上記研究領域における学生



センター看板の上掲
(右：佐々木学部長、左：橋本)



前田准教授による講演

の技術者としてのスキルアップを実現、高度技術者として地域企業へ学生の輩出すること等を第一の目標としています。

他愛のないような疑問も大きな技術革新、地域財産の創生につながる種を持ち合わせているかもしれません。同窓会の皆様には、どんどん情報をいただきたく思います。それらを基にして本センターが地域活性化に貢献できれば最高です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

金木農場における教育研究と新たな取り組み

金木農場主事・准教授 姜 東 鎮
助教 房 家 琛

農学生命科学部附属生物共生教育研究センターには金木農場と藤崎農場の二つの農場があります。藤崎農場と言えば「赤いリンゴ」でよく知られていますが、金木農場については知らない人も多いかと思います。そこで、金木農場で行っている教育研究や、新たな取り組みについて紹介したいと思います。

まずは、同窓会の皆様も一度経験があると思いますが、本センターのメインとなる学生教育は何と言っても本学部の5学科を対象とする「農場実習」です。農場実習は本センターの金木農場と藤崎農場が総実習時間の半分ずつ分けて実施している農場ならではのフィールド学習です。金木農場では大きく作物分野と畜産分野に分けて、それぞれの分野に専任教員1名ずつが実習教育を担当しています。作物分野では青森県の栽培イネ種や、アフリカの飢餓を救う目的でアフリカの国際研究所 (AfricaRice, 旧 WARDA) で開発されたネリカ (New Rice for Africa) など、農学という学問としての理論的教育と、栽培管理といった実践的教育の両面から食糧としてのイネをより深く知る実習を行っています。さらに、これまでに本県のような寒冷地で栽培したことのない熱帯飼料作物ネピアグラスを学生実習プログラムに取り入れ、寒冷地におけるネピアグラスの栽培方法や生育解析などといった研究的な要素も加えたフィールド科学を教えており、農場実習を通して将来地域社会に貢献できる人材育成にも力を入れています。一方で畜産分野の実習では、「種付けから食卓まで」をモットーに主要家畜 (禽) の生産に関する基礎知識を講義で教えています。その後、実践的に肉用牛の人工授精模擬、子牛馴致、素牛審査および捕捉保定方法、綿羊の毛刈りおよび体重測定

などの実習を行い、牧場防疫の重要性、畜産作業の危険性や動物の扱い方を教えています。学生が家畜に触れ合い、また、家畜の糞尿汚れや臭気を体験することで、畜産物生産の大変さも理解してもらう基礎と応用の両面から学生教育を行っています。

金木農場の作物分野での研究は「イネ」と「飼料作物」を研究材料としています。まず「イネ」に関する研究を簡単に紹介しますと、①イネ栽培期間中の気温の変化とイネ収量との関係について調べています。青森県奨励品種と青森県以南で育成・栽培されるイネ品種を用いて気温の変化がイネの登熟歩合やイネ収量、食味に及ぼす影響を北五津軽地方の環境条件下で栽培した青森県以南の品種と青森県奨励品種とで比較して調べています。②一方で、コメ生産のために支給されていた補助金がなくなり、作付け放棄の水田が増えていることを踏まえ、水田として保全しつつ、作物生産を可能にすることを目指し、寒冷地においても他の栽培イネや飼料イネ品種に比べて極めて高い茎葉部乾物収量や籾収量を示す上、栽培管理がしやすいアジアイネとアフリカイネの種間交雑種NERICA (New Rice for Africa) 数系統を用い、農地保全を行いつつ新規飼料としてのホールクロップサイレージ開発の可能性を検討しています。③種間交雑種NERICAはアフリカ大陸に広く普及され、栽培されるようになってきました。一方で不良環境が多く存在するアフリカにおけるNERICA種の栽培には不良環境に対する耐性を併せ持つ多収性イネが強く求められているのが現状です。そのため、不良環境条件下で栽培可能なNERICA種の選抜やその耐性メカニズムの解析が緊急の課題となっています。そこで、国際機関と

連携し水ストレスに対する耐性を持ちながら多収を示す NERICA 系統の選抜とその耐性メカニズム解明を行っています。

一方で「飼料作物」として注目しているのが、熱帯アフリカ原産イネ科牧草のネピアグラスです。ネピアグラスは南方系植物で、巨大な茎葉部バイオマス（世界記録で乾物収量85トン/1ヘクタール）を持つ牧草です。もともと多年生植物ですが、九州地方の熊本県以北では越冬ができず晩秋に茎の下位節に形成される越冬芽を利用して繁殖する栄養繁殖植物です。そのため、越冬ができない本州地方で栽培する場合は越冬芽から苗を作り翌春に植える1年生植物として利用します。青森県気象条件下でも移植後4ヶ月で草丈が3.6m、半年で茎葉部乾物収量は1ヘクタール当たり乾物収量が25～30トンと旺盛な生育を示しています。①このネピアグラスの巨大なバイオマスに本県の未利用資源のリンゴジュース搾り粕を混合し、家畜の飼料に適した新たな飼料を開発し、弘大アップルビーフやアップルラム生産コストの軽減を目指しています。②一方でネピアグラスは東日本大震災による福島第一原子力発電所事故で漏れ出した放射性セシウムに汚染された農地の除染にも極めて有望で、現在全町が警戒区域に指定されている浪江町で放射性セシウム汚染農地の除染に使用しています。国による農地除染手法の表土剥離法だけでは100%の除染は不可能であり、除染後にも土壤中に概ね30%～40%程度の放射性セシウムが農地に残ってしまいます。ネピアグラスによる農地除染は、表土剥ぎ取り法による除染後、農地に残る放射性セシウムの除去を広範囲かつ安価で除染ができることや、原子力発電所事故の前に農地がすでに耕起・耕耘され、土壌の深いところまで放射性セシウムに汚染されて表土剥離法での除染が困難な農地にきわめて有効です。また、農地は耕作しなければ農地としての機能を失い、やがて原野に戻ってしまうので、除染植物を栽培し、確実に除染していくことにより、除染と農地保全の両方が可能になるものです。さらに、除染後にバイオ燃料の原料としての利用可能性が高く、バイオ燃料にすること（ネピアグラスに吸収された放射

性セシウムを完全に除去できたもの）で、エネルギー創出と放射性廃棄物の減量化も実現できるなど、ネピアグラスによる農地除染のメリットを生かし、放射性セシウム汚染農地の除染にも力を入れています。

一方で畜産分野では1970年代から青森県特産のリンゴジュース搾り粕（以下リンゴ粕）の反芻家畜飼料利用に関する研究を行ってきました。具体的には、リンゴ粕 TMR サイレージの良質発酵、長期貯蔵性、嗜好性および消化性向上などの調製給与技術に関する研究を行うとともに、ホルスタイン雄、日本短角種および黒毛和種牛への長期間給与による産肉能力、肉質評価試験を実施しています。日本一のリンゴ生産量を誇る青森県ではリンゴジュース加工後に発生するリンゴジュース搾り粕（リンゴ粕）を産業廃棄物として処分せざる得ないため、コストがかかってしまうのが現状であることを踏まえ、金木農場では平成21年度から本学農学生命科学部教員と共同で、リンゴジュース加工後に残る搾り粕を穀物と混合した独自の飼料を用いて、「弘大アップルビーフ」の生産技術の開発に取り組んでおり、「弘大アップルビーフ」の地域ブランド化と地域産業の活性化を図るための取り組みを展開しています。2011年2月に「弘大アップルビーフ」の商標を登録し、同年6月には学長裁量経費の支援を受け、「弘大アップルビーフ特別生産牛舎」も完成しており、牛舎内の換気設備などに太陽光発電で得た電力を使用するなど自然エネルギーを利用した生産にも取り組んでいます。

さらに、肉用牛の粗飼料自給能力を向上するために、平成23年から熱帯アフリカ原産の多収性牧草種のネピアグラスを用い、サイレージ発酵品質および肉用牛における嗜好性の品種間差異を調べるなど、新規導入牧草と地域特産食品残さを活用した新たな飼料資源の生産・調製技術にも取り組み、嗜好性が高くかつ高栄養の新飼料開発を進め、地域の未利用資源を活用した飼料生産のもとで地域ブランドを目指した「弘大アップルビーフ」の総合的な生産技術の開発に力を入れています。

平成26年度卒業生・修了生の祝賀会

平成27年3月24日に、平成26年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は183名、大学院修士課程修了生は43名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は7,128名、研究科修了生は989名となった。

あいにくの天候のため、学部203講義室にて記念写真撮影を行った。恒例の学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会は、改修された学生会館内スクーラムで開催され、恩師や友人との別れを惜しんだ。



卒業祝賀会の費用の約半分が同窓会費で賄われています。また、学部卒業・大学院修了記念写真の費用は全額が同窓会費で賄われています。

事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>) からダウンロードできます。

訃報

澤村 健三 元教授（植物病理学） 平成27年4月13日 御逝去（享年89歳）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新任教員の自己紹介



森田 英 嗣 准教授 (分子生命科学科)

2014年9月より分子生命科学科に着任いたしました。私は、哺乳動物に感染するプラス鎖RNA ウイルスの研究に取り組んでいます。ウイルス感染後の細胞内の異常を解

析することで本来の正常な細胞の機能が明らかになるのではないかと考えその分子機構解明に向け研究に取り組んでいます。弘前から世界に発信できるような研究を目指し頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。



高梨子 文 恵 准教授 (園芸農学科)

2014年11月より園芸農学科に着任いたしました。専門は農業経済学で、東南アジア地域の農産物流通を中心に研究をおこなってきましたが、近年は国内の地域農業の活性化や女性農業者の動向にも着目しています。東北地方

への赴任は初めてで、西日本との農業の違いに驚くばかりです。弘前大学では、海外でのフィールド調査に加えて、津軽平野の農業・農村を社会経済学的な側面からバックアップできるような研究に取り組んでいきたいと考えています。何卒よろしく宜しくお願いいたします。



横山 仁 准教授 (分子生命科学科)

2014年11月より分子生命科学科に着任した横山と申します。研究テーマは動物の再生現象、とくに両生類の手足(四肢)と皮膚の再生を中心に研究しています。農学生命科学部では自分のキャリアの中で初めて自分のラボを持た

せていただき、教育と研究に打ち込めることに感謝しています。自分の専門である発生生物学、再生生物学を基盤に、学生さんたちに再生現象のような個体レベルの生命現象の面白さを感じてもらえる教育をしていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしく宜しくお願いいたします。



山尾 僚 助教 (生物学科)

1月から農学生命科学部生物学科に着任いたしました山尾僚(やまおあきら)です。専門は森林生態学で、森林植物を巡る生物間相互作用とそれに対する植物の振

る舞い、それらの森林の生物群集への影響などについて研究しています。旅行が好きでいろいろな場所に行きましたが、東北は初めてなので、いろいろな発見を楽しみにしています。今後ともよろしく宜しくお願いいたします。

教職員人事

退職（定年退職） 平成27年3月末日

工藤 明（くどう あきら）

教授（地域環境工学科）

原田 竹雄（はらだ たけお）

教授（生物資源学科）

採用（新任）

森田 英嗣（もりた えいじ）

准教授（分子生命科学科） 平成26年9月1日

高梨子 文恵（たかなし ふみえ）

准教授（園芸農学科） 平成26年11月1日

横山 仁（よこやま ひとし）

准教授（分子生命科学科） 平成26年11月1日

山尾 僚（やまお あきら）

助教（生物学科） 平成27年1月1日

会費納入と住所通知のお願い

平成27-28年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

戸羽 隆宏 電話 0172-39-3786

E-mail ttakki@hirosaki-u.ac.jp

松崎 正敏 電話 0172-39-3804

E-mail mma@hirosaki-u.ac.jp

田中 和明 電話 0172-39-3816

E-mail k-tanaka@hirosaki-u.ac.jp

（メールアドレスのドメイン名が変更され、“cc.”が削除されました）

農学生命科学部創立60周年記念式典・祝賀会のご案内

多数の会員の皆様から、醸金を頂戴致しました。厚く御礼申し上げます。記念式典および祝賀会が下記の通り開催されます。皆様のご出席をお待ちしております。

記念誌は6月末に発行の予定です。1口（5,000円）以上の醸金を下さった会員には7月以降に記念誌をお送りする予定です。

記念式典：平成27年7月4日（土）13時から

会場：弘前大学50周年記念会館みちのくホール（弘前大学本部横）

記念講演：記念式典終了後、同会場にて

講演者 弘前市公園緑地課 樹木医 小林勝氏（昭和51年3月園芸学科卒）

演題 「弘前公園の桜はなぜ・・・なのか」

記念祝賀会：平成27年7月4日（土）16時から

会場：弘前大学学生会館3階

会費：5,000円（3口以上の醸金を下さった会員は無料です）

ご不明な点は総務幹事戸羽（0172-39-3786あるいは ttakki@hirosaki-u.ac.jp）までご遠慮なくご照会下さい。

平成27－28年度同窓会総会開催のご案内

下記の通り、60周年記念式典当日の午前中に開催致しますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

なお、ささやかではございますが、昼食をご用意する予定です。準備の都合がございますので、ご面倒ながら、ご出席下さる会員におかれましては、6月19日（金）までに、総務幹事戸羽（0172-39-3786あるいは ttakki@hirosaki-u.ac.jp）に、ご芳名、ご卒業年、学科をご連絡下さいますようお願い申し上げます。

開催日時：平成27年7月4日（土）11時～12時

5 平成27－28年度役員

場所：弘前大学農学生命科学部203講義室

6 その他

議題：

- 1 平成25－26年度事業報告
- 2 平成25－26年度会計報告
- 3 平成27－28年度事業計画
- 4 平成27－28年度予算

報告事項：

- 1 学部60周年記念事業
- 2 その他

母校援助費で整備されました

同窓会では、学部建物周辺の環境整備に役立てていただくことを目的として、会費収入の一部を学部へ寄付しています。平成25・26年度は49万円を寄付しました。その一部を使って、さわらの剪定が行われました。



剪定前



剪定後

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)